

## 阮籍の「獼猴の賦」について

—

阮籍字は嗣宗（二一〇—二六三）の賦については、かつてその一部分を論じたこともある（注一）。今それを補う意味で右の一編の賦を述べることにした。

彼が竹林七賢人の一人であり、世俗を白眼視し、方外の士であったことは、今さういふ必要はない。けれども、それがいかに賦に反映しているかについては、これを論じたものがないようである。思うにその賦も方外の士にふさわしい表現をなしている。

まず「獼猴の賦」の原文について述べよう。これは缺文もあつて完全ではないが、大意は知ることができる。

昔禹平水土、而使益驅禽。

滌蕩川谷兮、櫛梳山林。

是以神姦形於九鼎、而異物來臻。

故豊狐文豹釋其表、間尾騶虞獻其珍。

夸父獨鹿被其褰、青馬三騅棄其群。

此以其壯而殘其生者也。

昔、禹は水土を平らかにし、そして益稷をして禽を逐い遣らしめ、川谷をあらいすぎ、山林をくしけずった。（尙書益稷参照）このゆえに、神姦（鬼神怪異）は九鼎に形となつて象（たが）られ、そして遠方の九州の各地より、山川の奇異なる物が図画となつて、献げられて来た。

（左氏伝宣公三年、昔夏之方有德、遠方凶物、貢金九牧、鑄鼎象物、百物而爲之備。使民知神姦。）

故に、豊狐文豹はその表を釈て、大尾の騶虞は、みずからその珍獣の身をささげた。

（莊子山木、夫豊狐文豹棲於山林、伏於巖穴、靜也。夜行晝居、戒也。雖饑渴隱約、猶且胥疏於江河之上、而求食焉、定也。然且不免於網羅機辟之患。是何罪之有哉。其皮爲之災也。韓非子喻老、翟人有獻豊狐文豹之皮於晉文公。文公受客皮而歎曰此以皮之美自爲罪。傳巽の奢儉論に「豊狐以赤色禍身。」とある。

（山海經海内北經、林氏国有珍獸、大若虎、五采畢具、

中 島 千 秋

長於身。名曰騶吾。吾は虞と通ず。尙書大伝、閒尾倍其身。閒は大の意。夸父や獨鹿の獸はその豪をはらいさり、青馬三騶はその群を棄てさった。

これはその大きく美しいために、その生命をそこなったものである。

(呂氏春秋求人、犬戎之國夸父之野。注獸名。)

(山海經南山經、枉陽之山有獸焉。其狀如馬而白首、其文如虎而赤尾。其音如謠。其名曰鹿蜀。佩之宜子孫。

(郭璞伝、佩謂其皮毛。本草綱目獸類、獨、似獫狁而大、能食獫狁。按ずるに、原文獨鹿は綱目に従い各々別の獸獨と鹿とすべきか。山海經は二字で、一獸の名であるが、郭伝は賦の意と同じところがある。蜀と濁とは字を異にするが、賦が誤っているかも知れぬ。異本あるいは蜀となっているものがあるかと察せられるけれども、今は張溥の漢魏六朝百三名家集と全三国文ともに同じくしているのに従う。)

(山海經大荒東經、東北海外、又有三青馬三騶(郭璞伝、

馬蒼白雜毛為騶。大荒南經、有蓋猶之山者。有青馬。

有赤馬。名曰三騶。有南類之山。爰有遺玉青馬三騶視肉甘華百穀所在。)

以上一段である。禹の治水と開拓のために、遠国の珍しい異物も、王の朝廷に献上されて、その威力を失い、狐豹もその毛皮の美しいためにはぎとられ、大尾の騶虞もその珍獸なる

がゆえに献上され、夸父獨鹿もその細い毛を抜きとられ、青馬三騶も人の捕えるところとなって、その生命を失うに至るというのである。これらはすべて生れつき人に珍重されるものを持っているために、身を滅ぼすものの比喻である。

次に

若夫熊狙之遊臨江兮、見厥功以乘危。

夔負淵以肆志兮、楊震聲而□皮。

處閒曠而或昭兮、何幽隱之罔隨。

かの熊狙の遊びて江に臨むがとき、その巧(功)みなわざを見めして、かえって生命をあやうくし、夔は淵を背にして志を肆いままにし、震の声を揚げて、かえって皮をはぎとられる(缺字の意味を推測して補う)。明るいところ処るから、人の目につくものがある。どうして人目につかぬ隠れたところに身をひそめていないのか。

(莊子徐無鬼、吳王浮於江。登乎狙之山。衆狙見之。逃於深藪。有一狙焉。見巧於王。王射之。敏給搏捷矢。王命相者、趨射之。狙執死。

狙(手長猿)が吳王の速射する矢を次ぎ次ぎに手づかみする器用さ巧みさを誇ったために、かえって殺されたという右の出典をふまえていると思われるが、原文の狙は字が異っている。熊とならべているから、他に出典があるかも知れない。)

(山海經大荒東經、東海中有波山。入海七千里。其

上有獸、状如牛。蒼身而無角。一足。出入水則必風雨。

其光如日月。其声如雷。其名曰夔。黄帝得之、以其皮爲

鼓。概以雷獸之骨。〔郭璞伝、雷獸即雷神也。人面龍身

鼓其腸者。概猶擊也。〕声聞五百里。以威天下。

黄帝が大猿の皮で、雷神の鼓の腹を作ったというのをふ

まえたもの。）

以上第二段は、熊狙、夔ともに、人にもてあそばされ、利用されるものを持っていて、それを人目にさらすために、生命を保たないことを説いている。

潛畏逼以潛身分、穴神丘之重深。

終或餌以求食分、鳥窰之而能禁。

誠有利而可欲分、雖希覩而爲禽。

故近者不稱歳。遠者不歴年。

大則有稱於萬年。細者則爲笑於目前。

騶（はつか鼠）はびくびくして身をひそめ、神丘の奥深い

ところに穴を作って住むが、すでに餌に惑うて食物を求め

るとなると、どうしてこれ（廟祭の牛）をうがつのを止め

られようか。まことに利用できて欲しいとなったら、たと

えまれにしか姿を見せない珍獸の類でも、人のとりこと

なる。故に身じかにいるもの（熊狙、夔の類）でも一年の

よわいももたず、遠いもの（禹の怪異、狐豹以下青馬三

騶）でもその生命は年をこさない。ただ、大なるものは万

年も評判になるが、細く小さいものは、目の前で笑われる

のだ。

（左氏伝成公七年、「騶鼠食郊牛角。改卜牛。騶鼠又食其

角。乃免牛」。哀公元年にも見ゆ。また定公十五年に「

騶鼠食郊牛。牛死。改卜牛。」とある。説文に小鼠とい

う。襄公二十三年、「（齊公）対曰：抑君（臧紇）似

鼠。夫鼠晝伏夜動。不穴於寢廟。畏人故也。」とあ

る。原文はこれらをふまえている。ここの寢廟は居室の

意。ところで郊牛は郊の祭の牛。その祭壇の地下に穴を

作るから神丘といったのであろう。）

以上第三段は、はつか鼠のような小さい動物でも食物になると

知ったらこれをかじる。だから人は利用できるもので欲しい

ものがあれば、めったにない珍獸でも捕えてしまおうというの

である。かくて賦は後半に入り、題名の猿をうたう。

夫獼猴直其微者也。猶繫累於下陳。

体多似而唯類、形垂殊而不純。

外察慧而内無度分、故人面而獸心。

性褊淺而干進分、似韓非之囚秦。

揚眉額而驟呻分、似巧言而僞眞。

藩從後之繁衆分。猶伐樹而喪鄰。

そもそもこの猿はその微小なるものに当るのである。それ

でも人の後列（下陳）につなされる。体つきは人に大いに

似ても、人の類ではない。顔色は人と違って美しくない。

外はさかしくても内はのりがなく、もとより人面獸心。性

はあさはかで出世を求め、韓非子が秦にとらわれたのと似ている。額を揚げて、しばしば呻き、巧言に似て真をあざむく。後についている多数の人々を藩にして身を守っているものの、あたかもその隣人との境になる藩の樹木を切つて、隣人の秘密をあばき、そのよしみを失うようなものだ。

(韓非子説林。隰斯彌見田成子。田成子與登台四望。三面皆暢。南望隰子家之樹蔽之。田成子亦不言。隰子歸。使人伐之。斧離數創。隰子止之。其相室曰。何變之數也。

隰子曰。古者有諺曰。知淵中之魚者不祥。夫田子將有大事。而我示之知微。我必危矣。不伐樹、未有罪也。人之所不言。其罪大矣。乃不伐也。

これは隣人の大事な野心を見抜いたと悟られては禍のもとと知って、樹木を切らなかつた話である。これを原文は逆に用いて、猿の淺知恵が人に捕えられて飼殺しにされる禍となることを述べている。) )

賦は後半に入るが、段落は第四段に当る。前段で述べた「細き者は則ち目前に笑はる。」というその嘲笑の対象となるのが獼猴である。この猿を秦の囚人となった韓非子に喩えている。いうまでもなく、韓非子は韓のために秦に使い、秦王政はこれを歓迎したが、彼を信じて用うるまでにならなかつた。その時秦の李斯と姚賈とは嫉妬から彼を秦王に讒して毒死させる。彼は秦のためにはならない。もし韓に帰国させる

なら、秦の天下統一の野心を知られて不利である。だから今のうちに殺すがよいというのであった。彼は自国のために秦に使いして、わなに落ちた。秦の虚実をのぞき過ぎたのである。「樹を伐りて」そして隣国である秦の友好を失った。「隣を喪ふ」こととなったのである。彼の話は史記列伝によつたが、賦のいうところはここにある。これは阮籍の当時における勢力のない小貴族の比喩であつたと思われる。

さて次に

整衣冠而偉服兮、懷項王之思婦。

耽嗜慾而眇視兮、有長卿之妍姿。

舉頭吻而作態兮、動可增而自新。

新沐蘭湯而滋穢兮、匪宋朝之媚人。

終蚩弄而處繼兮、雖近習而不親。

多才伎其何爲。固受垢而貌侵。

衣冠をととのえて、美服をつけ、富貴の身となると、仲間のものに知られたくなり、錦を着て故郷に帰ろうと思つた項羽と同じ思いを抱く。欲にふけてながし目にみる(一本眇に作るが取らない)そのさまは、司馬長卿(相如)の美しい姿に似ている。頭と口さきとを挙げて、しなをつくり、動けば動くほど自然に目先きの変つた新しいしぐさをする。はじめて蘭の湯をあびて身を清めても、ますます穢はふえるばかりで、美貌の宋朝が人に媚びたようなしるものではない。すでに笑ひものにされてつながら、そばにい

るものでも心からちかづかぬ。才能が多いからとて何になろう。もとより恥をかき面目もつぶされる。

(漢書項籍伝、富貴不歸故郷、如衣錦夜行。史記項羽紀作衣繡夜行。同紀、沐猴而冠。集解沐猴獼猴也。

春秋宋公子貌美而淫。論語雍也、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣。第三行目から換韻)

以上は第五段である。この猿が出世して富貴の身となっても、つまりは猿は猿、人にながれ、笑いものとなっても、ほんとうには愛されない。人の中にもこれに似た貴族がいるのである。宮廷の高い地位に上っても、人主もしくは有力貴族を保護者としても、飼殺しの運命しかないことを暗示している。次の最後の段に至って明らかになる。

姿便捷而好技兮、超超騰躍乎岑嶽。

既□□東避兮、遂中岡而被尋。

嬰微纏以拘制兮、顧西山而長吟。

緣榭榭以容與兮、志豈忘乎鄧林。

庶君子之嘉惠、設奇視以盡心。

且須臾以永日、焉逸豫而自矜。

斯伏死於堂下、長滅没乎形神。

姿はすばしこくて芸を好み、峰のいわおをこえて飛びあがる。(欠字の句は省く)けれども、岡のいただきに追いつかれて探し出された。三つよりの繩にひっかかり、拘えられて自由にならず、西山の故郷をかえり見ていつまでもさ

けぶ。たる木によってのんびりしているようだが、まさか鄧林の志(仙郷を思う心)を忘れたのではあるまい。君子のよき恵みを願い、風変りな目つきをしつらえて心を尽して仕える。しばらく憩いして日を長くして生きのびたいと思いつくすれ、とても楽しく生きてひとり勝手気ままに尊大ぶるところでない。ところが堂下に死体となって横たわり、永久に形体と魂神は滅んでなくなってしまった。

(淮南子墜形、夸父棄其策、是爲鄧林。注「夸父神獸也。

飲河不足。將飲西海、未至、道渴死。見山海經。策杖也

其杖生木而成林、鄧猶木也。一曰仙人。」山海經海外經

郭璞伝、「夸父者蓋神人之名也。其能及日景而傾河渭。

豈以走飲哉。寄用於走飲耳。幾乎不疾而速、不行而至者

矣。此以一体爲万殊。存亡代謝寄鄧林而遯形。惡得尋其

靈化哉。」

詠懷詩其十、焉見王子喬、乘雲翔鄧林。

夸父を仙人とする説は古くからあったらしい。郭説が合理的に説明し、神人とするのも不自然ではない。仙人と

すれば鄧林は仙郷である。阮籍はこれを脱俗の世界の比

喩に使った。

説文解字注箋、少悒謂之須臾。悒は憩の意)

以上最後の第六段である。飼い殺しにされた猿は、小貴族の悲劇を象徴する。権力者の活殺自在の手中にあって、戦戦兢兢としているものの姿が風刺されている。

猿に関する賦は、阮籍以前では、後漢の王延寿の「王孫の賦」一編がある。これは王孫（猿）の形と習性を主としてうたったもので、今に残る文章から見ても、これに深い意味を托したものでなかったと思われる。芸文類聚（九十五）、初学記（二十九）太平御覽（九百十）にのせている。その一部を紹介すると、

原天地之造化、実神偉之屈奇。  
道玄微以密妙、信無物而弗為。  
有王孫之狡獸、形陋觀而醜儀。  
顔状類乎老公、軀体似乎小兒。

生深山之茂林、處巖巖之嶽崎。

縁百仞之高木、攀窈曼之長枝。  
背牢落之峻壑、臨不測之幽溪。  
尋柯條以宛轉、或捉腐而登危。

或群跳而雷透、乍瓜懸而瓠垂。（透、説文跳也走也。）

婦鎖繫於庭甃、觀者吸呻而忘疲。

初学記の文がその全文に近いものをのせているが、全後漢文

（卷五十八）もこれを収めている。文字に多少差のあるものもある。右は全後漢文により、その中から省略して掲げた。省いた部分は猿の習性ばかりであるが、右の部分もそうである。大意は、天地の造化によって、神の偉大なたらきで特に珍しい生物も生れる。これというのも、道は玄妙で無為自然であるからだ。わるがしい猿も現われる。形もみにくく行儀もわるく、顔は老人、体は小兒、……深山の茂った林に生れ、岩のあるけわしい山に住み、……高い木により、しなやかな枝をよじ、さびしい谷を背に、底知れぬ谷に臨み、大枝を求めてころがり、あるいは腐った木をつかまえて危いところに登る。……あるいは群をなして跳ね雷のように走り、たちまち瓜のごとく懸り瓠のごとくぶらりと下る。……鎖をもとにもどして、猿を庭のうまやにつなぎ、猿のこの動きを見ているものは、おもしろくて息をひそめて疲れも忘れた——というのである。

この一部分から察しても、王延寿のは猿をありのままに活写するにある。現在残っている文は完全ではないと見るのが常識であろう。しかし、右の文の始まりの二句の天地の造化などというのは、物をうたう賦の常道的表現であり、もとの賦のままを掲げてあると考えられる。省略した部分も、あまり飛躍した形跡は認められない。最後の「忘疲」以下にはあるいはいくらかの行文があったかも知れないが、右のままでも文章の結びとしてわるくはない。全部で六十四句である

## — 23 — 阮籍の「獼猴の賦」について

が、すでに述べたように猿の習性を面白く表現したものであって、これを人の比喩として滑稽化し風刺したものではないと思われる。従って最後まで阮籍の賦のように、みじめな死をとげるがごとき文章があったとは考えられない。文意にみても察せられるところである。

阮籍はこの賦を見ているのであろう。前掲の傍点の句において、「深山之茂林」は「鄧林」、「登危」は「乘危」と相應するものと思われる。そして、王延寿のに対して、人の風刺として表現している。具体的にどの人物を指すか明らかにすることはできないけれども、この作意は一見して明らかである。最後の猿の死に見ても、猿を賞めているものでもなく、特に悲しいとうたっているものでもない。むしろ冷然とうたい流している。

かかる冷い表現のしかたは、彼の「鳩の賦」にも見られる。全文を掲げるとは省略させてもらうが、序文がついていて、「嘉平年間のこと、二羽の鳩を得た。黍稷を常食としていたが、後についてに狗に殺された。」とあって、鳩の子を育てるつらさを述べ、最後に

聊俛仰以逍遙、求愛媚於今日。

何飛翔之羨慕、願投報而忘畢。

値狂犬之暴怒、加楚害於微軀。

欲殘没以糜滅、遂捐棄而淪失。

とうたっている。大意は、首を上下にふってさまよい、媚を

今日に求める。どうして自由に飛びまわるのをうらやまうぞ。恩に報いようと願うあまりに、小さな網の中に保護されているのを忘れて外に出た。そのため狂犬の怒りにあい、手ひどい傷をかよわい体に加えられ、残るかげもなく死にはして、そのままうち棄てられてなくなってしまった———というのである。(注2)

これも鳩の末路は冷くうたい収めている。ただこの場合は子を失った悲しみにひしがれて、人の家に飼われることになっている。その一節を示すと

揚哀鳴以相送、悲一往而不集。

終飄搖以流離、傷弱子之悼栗。

何依恃以育養、頼兄弟之親戚。

背草萊以求仁、託君子之静室。

とある。大意は、(秋風に巢は顛覆し)哀鳴をあげて親子はたがいに見送り、一たび去って子とともに一緒に再び集まらぬ。すでに風のまにまに別かれ別かれになり、弱子のかなしみおののくのは傷ましい。何をたのみに育てよう。兄弟の肉身をたのみとするのみ。荒れ草の土地をすて仁ニギハヤを求め、君子の静室に身を託した———というのである。

右から見ても、この二羽の鳩は災難にかかって子と離ればなれになる悲劇の主人公であり、人まねする欲の深い猿と違っている。作者は鳩に同情しても猿には同情していない。もちろん鳩も子を引き離され、やっと人の情に救われたところ

を、非業の死におそわれた人の比喩として書かれたものであろう。それだけ同情もしていることと思われるが、その最後の死の表現は、そうなるのも人の世の姿であるというひやかかなうたいかたである。客観的な叙述である。死という点から見ると、猿も同じである。だが猿の場合ではこの客観的叙述は、風刺的である。君子の情にすぎる点では鳩と似ているが、やむを得ずしてそうなった鳩と異なっている。猿はみずからその「才伎」のために捕えられる道を歩み、飼ひ殺しにされるのである。風とか狂犬とか外的条件によって死なないで、その才という内的条件で死ぬとするとともに、この猿の賦の風刺の鋭さと、猿に類する貴族に対する激しい批判を知ることができる。

## 三

阮籍のこの賦の表現は特異なものがある。その第一段は、すでに記したように、尙書に本づく禹、益稷に始まり、それに関連して左氏伝の夏の九鼎神姦を引き、莊子韓非子に本づく豊狐文豹、山海経の騶虞、夸父、獨鹿、三青馬、三騮など、すべて遠い昔の故事で、実際には見ることもできないし、そしてまず怪異的と思われるものを列挙して、いずれも美しく生れついた為に、人に生けどられ、殺されもすると述べている。一読して行文の間に異常な感じを起させる。現実

ばなれがしている。この世と違う世界があったことを知らせる。

彼は山海経の愛読者であつたらしい。その詠懐詩にも引用しているが賦においても「清思の賦」にも散見する（用例省畧）。それは現実の世界と異なる。形而下でなく形而上の世界である。「清思の賦」では世俗の世界を否定した、脱俗的超越的世界を表現するのに役立つ。感覚で知ることのできる現実と違って観念的世界を巧みに表現する。だからその賦の始めに「形の見るべきは、色の美に非ず。」という。声色の美の否定論にふさわしい表現である。

これは、形而上の世界をうたうものであるが、今から見ると単なる観念の世界に見えるけれども、彼にとつては形而上的世界も存在するものと考へている。右の賦については詳論を別稿にゆだねたいが、一例を挙げると、その世界はまた「清虚寥廓」の世界であり、そうすれば「則ち神物來集す」と述べている。形而上の世界には神物が存在するのである。

山海経にのせているものが、すべて非現実的なものとは考へられないが、怪異的な物も多い。彼は郭璞のように怪異的存在を説明しようとして、非現実と現実とを自然の気のなせるわざとして合理的に説明しようと試みた著書はない。しかし、この賦のように、山海経の怪異の動物を列挙し、次の第二段の熊狙や夔、驪、そして後半の獼猴など一つにして、同列に論じているのを見ると、山海経の異物も事実存在した

## — 25 — 阮籍の「獼猴の賦」について

かのように考えているらしい。そうとすれば、現実的存在で形而下の世界のものである。彼には「通易論」もあり「達莊論」の一部にも陰陽の気の万物を生むことを論じている（注3）。ただ残念ながら郭璞のような議論はない。しかし、怪異的存在を現実と同列におくには、郭璞の山海経観に近いものが、形をなさないままに、彼の考えにあったのであるまいか。それがまだ気の理論一本でまとまらないために、観念的存在であるかのようになったり、現実的物質的存在であるかのようになったりするのである。神物というのは前者で、異物というのは後者である。

従って、この第一段は天地の造化、陰陽の気の創造するところ、一度形をなせば各々性とするところがあつて、その性のため、ここではその美のためにかえつて生を害するということである。それをこのように理論的に表現しないで、じかに怪異の動物を挙げたのである。王延寿の「王孫の賦」の天地の造化などという句と比較すると、この差は明らかである。それだけ特異な表現である。当時の人も驚いたことである。

山海経など古い出典や現実ばなれした物を引用すると、その性をもつだけで生を害するのは、人も含めて生物のもって生れた宿命の深さを暗示する。性の抜きがたいものが感ぜられる。それが阮籍の思想の深さも語ることになる。

さて、第二段は、熊狙の表現は、第一段をさらに進めて、

現実的であるが、それだけ人目にわざとさらすようにする小ざかしさを表現する。そして、第三段では、第一段のような大なる物は古典にも残るが、この小なるものは目前に笑われるだけで、後世にも伝えられないものである。ここに作者の意地悪い眼を感じることができよう。

かくて、後半いよいよ題目となつて獼猴が登場させる。身は微小の存在でありながら、人面獸心、これは蘭湯で清めても抜きがたいものであり、その「才伎」のために遂に人に捕えられて死を迎える。この死の表現が冷くつき離れた表現であることはすでに述べた。作意もすでに触れておいたが、この猿のように、小ざかしく立ちまわつて、権力者に媚び、その才のために殺される人間の比喩である。韓非子が引用されるのも、要路の人に自分の主張を説き、人の心の秘密を知り過ぎたため、かえつて捕えられる結果となることを表現したのである。韓非子が人面獸心であつたというのではない。猿がそれに似ているというだけの比喩に過ぎないが、作者の用意はあつた。

すなわち、人面獸心の人間の比喩として、この猿を主人公としたのは、はばかりところがあつたためである。人面獸心とはいかなる人の比喩であろうか。それを裏づけるものに譙子法訓という書がある。今は残っていないが、初学記（二十九）の「猴」の部に、この断片を引用している。

人之所以貴者、以其礼節也。人而无礼、其獼猴乎。雖人象

蟲質也。

とある。人の貴いのは礼節があるからだ。礼がなければ猿か。人のかたちをしていても、虫（動物）の性質がある——というのである。これはこの賦の猿と同じである。この著者は譙周である。蜀の人で蜀の滅亡後は魏に仕え、後に晉に仕えた。法訓八卷があったという。阮籍と時代を同じくしている。法訓が先か、この賦が後かにわかに定めがたいが、たがいにその注脚とすることができよう。

この賦は、礼節を欠いた人が、いたずらにその才をひけらして、要路の権力者に取り入ろうとする末路を風刺したのである。それを禽獸動物とさげすんだのである。作者の本伝に

有司言有子殺母者。籍曰、嚙、殺父乃可。至殺母乎。坐者怪其失言。帝曰。殺父、天下之極惡、而以爲可乎。籍曰、禽獸知母而不知父。殺父、禽獸之類也。殺母、禽獸之不如。衆乃悦服。

とある。大意を省署するが、父を殺すのはまだしもよいと放言したので、文帝と坐にある貴族のとがめるところとなった。そこで父を殺すのは禽獸の類、母を殺すのは禽獸にもおよばぬと答えたのである。これを一場の機知と考えてはならない。話は一つしかのっていないが、阮籍は犯人おそらく貴族官僚のはしくれであろうが、それを動物ぐらいにしか見ていなかったことを語っている。父母を殺すまでしなくとも、礼節を知らぬものの姿を書こうとしたのが、この賦である

う。

彼は礼教を無視した男である。しかしその偽瞞をにくんだのである。文帝の坐にいた時、何曾という礼教主義者が、彼を責めて「情を縦いままにして礼に背き、敗俗の人。」（晉書何曾伝）と責めたてたというが、脱俗的行為はかかる何曾に衆徴される官僚に対する抵抗でもあった。母の死にも囲碁をやめず、勝負がついて酒を飲み血を吐いて、骨と皮ばかりになったという話（晉書本伝）も、「性至孝」という書き出して始まる中にある。礼教の形式主義を極度ににくんだのである。真の礼節はその形式主義を否定したところにあると考えた。

猿の人まねは実はかかる礼教主義者を皮肉る意図もあったろう。「衣冠を整へて偉服す。」という表現の中にも察することができよう。また、猿の貪欲は、有力貴族の何曾、賈充などを代表にとるまでもなく、大部分の貴族の人生観であり、養生觀の理想であった。向秀の「難養性論」に見る「富貴は天地の情なり。」「先王の重んずるところにして、これを自然より開く。」とある富貴肯定論は、大小の貴族の代弁であったと思われる。「達莊論」や「清思の賦」などに見る声色否定、情欲否定の論者である作者にとっては、猿にも等しい所行であり、動物的本能でもあったわけである。これらを白眼視するのは当然であろう。

賦の最後は君子すなわち有力貴族に保護されて、ひたすら

## — 27 — 阮籍の「獼猴の賦」について

ごきげんをとる下級貴族の姿を述べている。権力は人主に等しいといわれた賈充に、何曾は内心彼をいやしみながら、媚びて正直の士の非難を受けたと何曾本伝に記している。有力貴族にして然りとすれば、他の小貴族はいうまでもなからう。斜陽貴族で微力であった阮籍はこれをまた白眼視したのである。

「大人先生傳」に、ある人が書を送って、「天下の貴きは君子より貴きはなし。服に常色あり、貌に常則あり、言に常度あり、行に常式あり。……心は氷を懐くがごとく、戰戰慄慄、身を束み行を修め……ただ礼をこれ克くす。」とあった。これに対して阮籍は「(世がまちがっているから)いづくんぞ身を束み行を修むるを得ん。……進んで利を求め以て身を喪し、爵賞を営みて家滅ぶ。汝又いづくんぞ金玉の萬億なるを挟み、祇みて君上に奉じ、妻子を全ふするを得んや。」と答えている。賦の中にいう君子の末路を述べたものであろう。そうだとすると、猿は似て非なる礼法の士の比喩であるから、「大人先生伝」にいう君子に当る。賦中の君子も実は同類だが、そこでは猿に対して人という意味に使い、區別すると有力貴族で猿の微力貴族に対するものであろう。

詠懐の詩(其六十七)に礼法の士を歌い、

放口従衷出、復說道義方。

委曲周旋儀、恣態愁我腸。

とある。右は十四句の中の最後の四句である。礼儀をはずす

まいとするその姿態は、作者の心より愁うるところだといのである。その姿態こそこの猿の姿に外ならない。

この賦の製作年代は分からない。何曾その他の前記の人物を指すという確証はない。しかし、魏晉の士人の一般的特徴であったと思われる。いうまでもなく一編の時事批評であった。脱俗的世界から、世俗を否定的に見たものである。それは「清思の賦」の声色否定にも通ずる。また第一段の怪異的表現は、当時の常識的表現を破ったもので、その全体の風刺的意図とともに、当時の貴族趣味の美麗で上品な文章になれた目からは、高い評価を与えられなかったであろう。けれども、今日から見ると、賦史の上では特異であり、比喩的表現は賦の宿命といいながら、リアルな客観的精神を感じさせるものといえることができる。

他の諸賦と比較して論ずるつもりであったが、長くなるので省いた。他の作品は後日にゆずりたい。また、これは昭和四十年年度総合科学研究「六朝芸術論の研究」の中の「六朝賦論」の一部である。(一九六六・三・五稿)

注、1、「阮籍の論と賦について」(日本中国学会) 報・第九集

2、詠懐詩其四十八、鳴鳩嬉庭樹、焦明遊浮雲。焉見狐翔鳥。翩翩無匹群。死生自然理。消散何積粉。

この詩は鳩について賦とほとんど同じ意をもっている。

3、達莊論、天地生於自然、萬物生於天地。……升謂之陽、降謂之陰。……人生天地之中、體自然之形。身者陰陽之積氣也。性者五行之正性也。情者遊魂之變欲也。